

平成 30 年 6 月 27 日現在

機関番号：14302

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04426

研究課題名(和文)一文読みの開発と読解力向上効果の検証に関する研究

研究課題名(英文) Research on the development of one sentence reading and the verification of the effect of improving reading comprehension

研究代表者

寺田 守 (Terada, Mamoru)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00381020

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は国語科「読むこと」の学習において、一文の意味を考えるという解釈法と小集団討議という学習活動とを用いた一文読みと名付ける指導法を開発し、その読解力向上効果について検証するものである。話者の判断の表れる言葉に着目することで登場人物の言動の意味を理解する解釈の方法の有効性を調査したところ、中学2年生において7割の学習者が十分満足できる到達度に至っており、適切な学習内容であることがわかった。また、「タオル」「高瀬舟」「こころ」「オツベルと象」などを教材として授業について検討したところ、学習者自らが思考力を働かせて考えを組み立てていくことによって主体的で深い学びが実現することが明らかになった。

研究成果の概要(英文)：In this research, we develop a teaching method called nomari reading by using the interpretation method of considering the meaning of one sentence and learning activity of small group discussion in learning of Japanese language class "reading", and verify the effect of improving reading comprehension ability. We investigated the effectiveness of the interpretation method to understand the meaning of the characters' behavior by paying attention to the words that the speaker's judgment appears, and as a result, 70% of students in junior high school graduates have achieved satisfactory satisfaction, It turned out that it was appropriate learning content. Also, as a result of studying the lesson using "Towel", "Takase", "Kokoro", "Otsubo and Elephant", etc., students themselves learned subjectively and deeply learning by constructing ideas by themselves exercising their thinking skills It became clear.

研究分野：国語教育学

キーワード：読むことの学習

1. 研究開始当初の背景

読むことの学習指導において最も多くの時間と能力とが注がれたのが解釈法の開発であった、といっても過言ではない。だが、合理的な解釈法に基づいた授業であっても、学習活動への指向が不足すると、教師の導く問答型の授業となりやすい。他方で個の疑問や気づきを集団で発表し、話し合いを行ったり、初読の感想を印刷し、コメントを付け合ったりなど、学習活動の工夫が試みられてきた。だが、個の疑問からなぜ型の問いを集団で解決する授業に典型的に見られるように、発言がかみ合わない局面が多く、解釈の深まりもないといった解釈法の不在による混乱も指摘されている。解釈の方法と学習活動とのバランスを吟味し、現代的な教育環境にふさわしい学習指導方法を構想することは、国語科教育研究の重要な課題である。

国際的な研究状況に目を向けると、1990年頃から多様な小集団の読書プログラムが北米の国語教師達によって提案された。リテラチャー・サークルやブック・クラブのような小集団討議と、わが国の国語科授業で通常行われる少人数の話し合い活動との重要な相違を一つ挙げるとすれば、それは、自己決定の程度だということになる。だがリテラチャー・サークルやブック・クラブを、教育的な脈絡の異なるわが国でそのまま実施するには、様々な困難がある。例えば、カリキュラムとの整合性、学習者の活動への習熟、国語科教育実践の歴史的積み重ねといった点を考慮して、段階を踏む必要がある。そこで日本型ブック・クラブの形を求めることとした。

2. 研究の目的

第一に、一文読みの方法を開発する。例えば「走れメロス」に次のような一文がある。私は、なんだか、もっと恐ろしく大きいもののために走っているのだ。

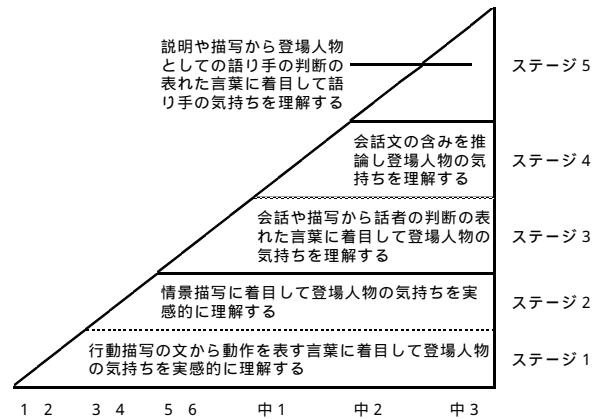
この文の言葉を削除し、例えば次のように書かれていたとしても、私たちはあるいは同じ意味だと理解するかもしれない。

私は、恐ろしく大きいもののために走っている。

もし同じような意味だと感じるならば、私たちが「なんだか」「もっと」「のだ」という言葉を読み飛ばしているということである。これらは話者の判断の表れる言葉(モダリティ表現)である。「なんだか」という言葉があることによりメロスにもはっきりとした理由がわかっていないということが分かる。また「もっと」とあり、間に合うかどうかや人の命と比べて、それ以上のものだとメロスは考えていることが分かる。そして「のだ」とあるので、強い確信をもって断定している。つまり、メロスは間に合うかどうかや人の命

と比べてはるかに大きなもののために走っていると強く確信していながら、それが何なのか、メロス自身もよく分かっていない、という意味がこの一文から分かる。

私たち読者はすべての言葉を正確に理解していなくても読めたと考える。しかし読み飛ばしてしまいがちな言葉の意味こそが読解において重要な手がかりとなる。これまでの研究(「科学研究費補助金:基盤研究(C)平成24-26年度」)で、図のような注目する言葉の学年別段階を明らかにした。言語学の知見に学びながら、言葉の意味を紡ぎ出す複数の方法を解釈法として確立する。



第二に、小集団による読書の学習の意義と課題について検討する。ブック・クラブのような小集団討議は、英語圏を中心に大きな潮流となっている。また、わが国の国語科教育研究に、これらを取り入れようとする意欲的な試みが増えつつある。しかし、一口に小集団による読書の学習と言っても、様々なプログラムがあり、授業観や学力観も異なっている。1990年からの25年間に提案され、実施されたプログラムを検討し、その意義と課題とを解明する。

第三に、小集団で一文を読む学習活動が、読解力向上に果たす役割を検証する。解釈を交流するための手立てを工夫すれば、自然と対話が生まれ、納得を示す「あー」という声が数分おきにどの小集団にもあがる。小集団で一文を読む学習には、解釈を深めるだけでなく、学習の意義を実感させる効果のあることが分かっている。しかしこれらの実践は、あくまで単発の授業での結果である。継続的な実施によって学習者の読解力にどのような貢献を果たすのかまでは明らかになっていない。そこで、研究協力校と一年間の共同研究を行うとともに、活用問題の形で評価問題を作成し、実施することで、小集団で一文を読む学習活動の読解力向上効果を明らかにする。

3. 研究の方法

一文を読む解釈法の開発...言語学の知見に学びながら、言葉の意味を紡ぎ出す方法の開発を行う。一文を読む解釈法として、現在

までに以下の四つのコツを方略として開発した。

・言葉の削除による意味の変化(この言葉があるのとないのとでは、意味がどのように変わりますか。)

・類義語への置き換えによる意味の変化(AとBとでは意味がどのように変わりますか。)

・動作化・映像化による意味理解(今ここで試してみたら。光景を思い浮かべてもらおう。)

・自分の経験との関連づけによる意味づけ(これと似た経験はありますか。)

これらのコツの根拠となるのは、言葉の意味が紡ぎ出される三種類の原理である。第一に、統語の働き(Syntagmatic)である。私たちが古典文法を頼りに古文の現代語訳を行うように、文法に代表される言語規則によって意味が決定される働きである。第二に、範列の働き(Paradigmatic)がある。私たちが「あっさり」と「さっぱり」の違いは何だろうと考えるように、辞書に代表される類義語との差異によって意味が決定される働きである(国広哲弥『構造的意味論』)。第三に、語用の働き(Pragmatic)がある。ユーモアや皮肉に代表される文脈によって意味が決定される働きである(ポール・グライス『論理と会話』)。例えばリチャード・ビーチは、グライスの言語行為論を手がかりとして、読者が登場人物の発言を文字通りの意味以上に理解できると考えて持ち込む様々な約束事を記述している(Richard, Beach. "Discourse Conventions and Researching Response to Literary Dialogue. ")。

こうした言語学の知見を踏まえて、さらに一文を読む解釈法の開発を行っていく。言葉の意味に関する文献を収集し吟味検討する。関連領域の文献だけでなくNCTE,IRAといった学会発行雑誌の教育論文を参照する。書籍購入,文献複写,現物貸借を行う。

小集団による読書プログラムの検討...1990年頃から,多様な小集団の読書プログラムが,北米の国語教師たちによって提案された。2015年までの25年間の取り組みと成果について検討する。その際,それぞれのプログラムの特徴を捉えながら見取り図を整理したい。例えば,ダニエルズのリテラチャー・サークルは,参加者の役割分担が明確だという特徴がある。こうしたタイプの学習活動に習熟していない学習者に,何をすれば良いのか明確に指示できる利点がある。他方でラファエルのブック・クラブは,一つの学習活動ではなく,カリキュラムになっている点が特徴である。

プログラムの提案だけでなく,小集団による読書を対象とした研究も進んでいる。例えば,ローレンス・サイプは,1・2年生の複式学級での7ヶ月の観察から得られたトランスクリプトを分析し,「分析的な反応

analytical responses」「間テクスト的な反応 intertextual responses」「個人的な問題としてとらえる反応 personalizing responses」「透明な反応 transparent responses」「行為遂行的な反応 performative responses」といった五つの反応タイプを導いている(Sipe, Lawrence R. "Individual Literary Response Styles of First and Second Graders")。また,リテラチャー・サークルにおける「間テクスト性概念」に注目するカシー・ショートは,関連づけを行うような発言が,小集団に提出されることで社会的な意味を帯び,小集団への参与構造を構築するという視点を提示している(Short, Kathy G. "Researching Intertextuality Within Collaborative Classroom Learning Environments.")。

こうした文献を検討することで,小集団による読書プログラムの意義と課題を解明する。

読解力向上効果の検証...平成27年度は,授業の試行的実施を行う。解釈法のレッスン・プログラムを作り,学習活動へのスムーズな導入を図る。また小集団の話し合いを対象に,社会的相互作用を分析することで,小集団で一文を読む学習活動の修正・改善を行う。分析にあたっては,C.Cazden, Classroom Discourse の社会言語学的方法を援用する。授業の試行的実施にあたっては,京都教育大学附属桃山中学校,附属桃山小学校,沖縄市の公立小学校,滋賀県内の公立小学校,大阪市の公立中学校を予定している。授業を記録するためビデオカメラを使用する。話し合い記録のトランスクリプトを行うため,ノートパソコンを使用し,作業を依頼する学生3名に謝金を支払う。

4. 研究成果

平成27年度は一文読みの方法の開発と読解力向上効果を検討した。

まず話者の判断の表れる言葉に着目することで登場人物の言動の意味を理解する方法について,文学の授業の学習指導目標として妥当であるかどうかを検討した。教科書を検討したところ小学校2年生,4年生,中学校1年生など多くの学年・教材で登場人物の気持ちを理解する目標が立てられていた。「タオル」を教材とした話者の判断の表れた言葉に着目して登場人物の気持ちを理解する授業を中学校2年生に行った記録を分析した。登場人物の気持ちを実感的に理解できることが分かった。7割の学習者が十分満足できる到達度に至っており,中学校2年生の学習指導目標として適切であることが分かった。

次に中学校3年生を対象とした「高瀬舟」の実験授業を行い,学習者が分析・解釈の主体となる授業のモデルの構築を行った。ラファエルの提案するヴィゴツキースペースを

参考としながら、教室の各場面において学習者が慣習的知識を適用・変形・公表・慣習化していく螺旋的循環の様相を記述した。

平成 28 年度は小集団による読書プログラムの検討を行うとともに、読解力向上効果の検証を行った。

まず「花はどこへいった」を対象として、文学作品が教科書に掲載される時、すでに特定のメッセージが付与されてしまうという文学教材の特質を明らかにした。国語教科書批判を検討することで、作品の表現を見ることなく作者の思想によって作品の意味が特定される状況について考察した。特定の解釈を教える文学教材の授業が、教師の意図しないところで「惚れさせる国語教育」(時枝誠記)となっている可能性を明らかにした。そして間テキスト性概念や表現分析を行うことで、こうしたあり方を越える方法を検討した。

次に前年度に引き続き「高瀬舟」の教材解釈についての文献調査を行った。「高瀬舟」における教室の中の作家/作者は、教科書教材として学習者に学習対象として登場する時にすでに「中学校の段階で森鷗外の作品を読んでほしい」というメッセージと共に提示されていることが分かった。その上で「高瀬舟」の特徴を生かした学習指導目標を検討するために、どのように読むことができるのかを考察した。そして一人の読者として喜助の二つの語りを「わが身の上に引き比べて」読む学習の可能性を検討した。

さらに小学校教材「ごんぎつね」を対象に、ラファエルの提案するヴィゴツキースペースを手がかりとして、教室で用いられる慣習的知識の具体を検討した。設定、人物、プロット、表現、語りといった観点から「ごんぎつね」の教材分析を行うことで、教室の場面において現れる慣習的知識の様相を記述した。

平成 29 年度は、小集団による読書プログラムの検討を行うと共に読解力向上効果の検証を行い、成果の公表を行った。

まず小集団による読書プログラムによって育まれる学力について、コンピテンシーの観点から検討を行った。国際的な新しい学力観を調査すると共に、日本の教育行政におけるコンピテンシー概念の検討の経過を調査した。その上で新しい学習指導要領における学力が読書プログラムにおいてどのように育まれるかについて考察した。

次に本学附属学校において実践された高等学校の「こころ」(夏目漱石)および中学校の「オツベルと象」(宮沢賢治)を教材とした授業における読解力向上効果の検証を行った。いずれも学習者の主体的な活動を軸とした授業であり、ポートフォリオや学力テストの結果を基に考察した。読むことの授業では解釈を導くだけでなく、その「わけ」が重視される。教師に導かれるだけでなく、学習者自らが思考力を働かせて考えを組み立

てていくことによって、主体的で深い学びが実現することが明らかになった。

そして研究の成果を全国大学国語教育学会においてシンポジウムとして口頭発表した。その内容をまとめ雑誌『国語科教育』に発表した。また京都教育大学国文学会の『国文学会誌』においても研究成果を発表した。

今後の研究の課題として、文学の読書の学習における「公共性」を教室でどのように実現するのかという問題が見えてきた。I(わたし)と YOU(あなた)とで完結しやすい教室の学習において、THEY(この場にはいない他者)となる存在をどのように学習者と出会わせていくのか。コンピテンシーが内包する社会性の部分を切り離してしまうと従来の習得と活用のモデルに収束してしまうことから、特に読むことの私的な領域に近い文学の授業でどのような形が考えられるのか検討していく必要があることがわかった。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 7 件)

1. コンピテンシーを育成する読むことの学習指導, 寺田守, 国語科教育, 査読有り, 83, 9-11, 2018
2. 「花はどこへいった」(今江祥智)の教材研究, 寺田守, 国文学会誌, 査読無し, 45, 1-12, 2017
3. 社会文化的相互作用を通して構成される文学の学び: 「ヴィゴツキースペース」を用いた「高瀬舟」の授業分析, 住田勝・寺田守・田中智夫・砂川誠司・中西淳・坂東智子, 国語科教育, 査読有り, 79, 39-46, 2016
4. 話者の判断の表れた言葉に着目する文学の学習: 中学 2 年生「タオル」(重松清)の授業, 寺田守, 京都教育大学紀要, 査読無し, 128, 89-105, 2016
5. 交流する読みの skill を高めよう 寺田守, 今日(の)学校図書館 第 40 回全国学校図書館研究大会(神戸大会)研究集録, 査読無し, 40, 191-192, 2016
6. 小集団で一文を読む, 寺田守, 月刊国語教育研究, 査読無し, 522, 40-41, 2015
7. 板書を上手に活用するヒント, 寺田守, 教育科学国語教育, 査読無し, 783, 41, 2015

〔学会発表〕(計 4 件)

1. 寺田守, コンピテンシーを育成する読むことの学習指導, 全国大学国語教育学会, 2017 年, 福山市立大学(広島県)
2. 寺田守, 読者の反応を生かす教材研究: 「花はどこへいった」(今江祥智), 京都教育大学国文学会, 2016 年, 京都教育大学(京都府)
3. 住田勝・寺田守・砂川誠司・田中智夫・中西淳・坂東智子・河野順子, 文学の学びにおける慣習的知識の検討: 「ごんぎつね」を中心として, 全国大学国語教育学会, 2015 年,

創価大学（東京都）

4. 寺田守・田中智夫・坂東智子，社会文化的相互作用を通して構成される文学の学び：「ヴィゴツキースペース」を用いた「高瀬舟」の授業分析，全国大学国語教育学会，2015年，姫路商工会議所（兵庫県）

〔図書〕（計4件）

1. 国語科カリキュラムの再検討，寺田守，全国大学国語教育学会編，査読無し，学芸図書，21-26，2016

2. 作家／作者とは何か：テキスト教室サブカルチャー，寺田守，日本近代文学会関西支部編，査読無し，和泉書院，145-163，2015

3. 国語科重要用語事典，寺田守，高木まさき・寺井正憲・中村敦雄・山元隆春編著，査読無し，明治図書，138・142・161，2015

4. 読書教育を学ぶ人のために，寺田守，山元隆春編著，査読無し，世界思想社，155-182，2015

〔産業財産権〕

出願状況（計0件）

取得状況（計0件）

〔その他〕

ホームページ等

『文学教材の解釈 2014』

<http://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/terada3/files/bungaku2014.pdf>

『文学教材の解釈 2012』

<http://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/terada2/files/bungaku2012.pdf>

『文学教材の解釈』

<http://kyoushien.kyokyo-u.ac.jp/terada/bungaku.pdf>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

寺田 守 (TERADA MAMORU)

京都教育大学・教育学部・准教授

研究者番号：00381020

研究者番号：

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者

(4) 研究協力者